

信 毎 歌 壇

小池 光 選

信号のかわつた声終るまでに渡り切れたり一本杖つきて (千曲市) 荒井よし子
ステージに「おとうさん」と声掛る村の楽団初コンサート (泰阜村) 松島 房子
クーラーの排水口にちよこつと座る雨蛙十日雨降らず (佐久市) 小泉 英介
吸物の大具になる心地して金太郎温泉の湯に浸かりをり (長野市) 原田りえ子
沓掛喜久男早や三回忌となりけり歌集ひらけば君は健在 (千曲市) 関 津和子
読み終へてやはらかになりし地方紙で水蜜桃を二重にくるむ (飯山市) 市村紀久子
日本語の巧いハーフの選手たちスポーツ界に新風送る (小諸市) 墨野 直人
プラタナス小暗きまでに繁りいてそのみ涼し校舎の裏道 (小諸市) 篠原 昭枝
左の頬しみができて悲しかり沢田研一と同じとこ (中野市) 増田きみ江
初恋は高三時代自転車でお茶して帰るゆきなり (佐久市) 臼田宇多子

佳作
また来るよ別れの際の言葉にはもう会えないよの響きがある (佐久市) 中田 恭子
突然に耳の奥から蚊の声す地球自転の音かも知れず (小布施町) 市村津枝

選 評

第一首、信号を渡りきるのもだんだん難しくなる。今日はカッコウの声が終わる前に無事渡り終えることができた。結句の二本の杖というところがはっとさせる。第二首、村の有志が楽団を結成して、

今日はそのステージである。家族がみんな聞きにきて、おとうさんと声がかか。すばらしい。第三首、雨がなかなか降らないのでカエルもたいへん。クーラーの排水口のようなところに。愛すべし。

小島 なお 選

馬のようにシャドーロールをつければいい自分の影が怖くなつたら (長野市) 原田りえ子
秋風が背を押しながら冬を越すために金を手放せと言ふ (松本市) 堀内 悠子
シロフォンが半音階を駆け上がるように広まる噂話 (松本市) 上嶋 晴美
金欠で推しのグッズを諦めるつらい夜にも酸素はあるよ (熊本市) 夏風かをる
1つぷらきろ知ってる限りの文字使い書いてくれなよトマトの重さ (佐久市) 橋詰美代子
花瓶に水させばあまたのつまさうじ浮かび上がりてさてはあの子か (中野市) 大坂くみ子
花に水、金魚にえきのルーティンを終えてひと時空気が旨い (小布施町) 高沢 光代
飲み残しペットボトルの水撒けば秋蟬の声ピタリと止まる (岡谷市) 川村 修平
扇風機回して寺の坐禅会腰の痛きも瞑想に入る (長野市) 渡辺 和代
ミシン踏み遅く聞こゆる祭りばやし繰目次々踊り踊れり (長野市) 森 ふうか

佳作
お隣もその又隣も夫も近き雨がそほ降るカーデンチエア (佐久市) 伴野チヅ子
芒を天ダリヤを地にと活花すハサミの音が静間に響く (中野市) 増田きみ江

選 評

第一首、自らの影におびえる競走馬のための馬具。人間も不安が兆した時には、あえて目をそらすのも手だ。第二首、木は葉を落とし、生物は冬眠へ向かう。手放したもののだけに訪れる春がある。第三首、軽

快な音色のシロフォン。音階を疾走するように、噂話は人から人へ瞬間に反響する。第四首、お金がないと推しを推すこともできない。けれど、どんな夜も酸素は無課金で私を守ってくれる。

米川 千嘉子 選

「お父さん教えて」と聞いた夫逝きて広辞苑手に短歌を学ぶ (伊那市) 松崎りつ子
秋祭り子ども神輿がやって来る「わっしょい」ビッじ「わっしょい」ビッじ (長野市) 小林 操
十月の校舎の屋根を軋ませて猿の駆けゆく英語の授業 (小諸市) 加藤 陽介
強風が吹かねば鳴らぬ風鈴はみちのく風鈴趣あれど (松本市) 中村 博穂
観光で光顧るとき陰も見る おりづるタワーに風が涼しい (箕輪町) 小林 泉
「首」の字はおおかたあまり良くない意味 短歌数える語になる不思議 (長野市) 松本 博人
ストライキ決行指示を待ちながら個室で麻雀した夜 (長野市) 宮崎 昌
絶好調得意のうたに酔いしれていつの間にか外れしか (長野市) 黒柳 響子
その茄子は食べてはならぬと息子言つ湧き出た蟻に葉まきし木の (松本市) 奥 綱枝
何という怪しさならぬ裏畑に出れば会えた友急逝し (佐久市) 臼田宇多子

佳作
快晴にゆつたり浮ぶ熱気球平和を願う十万人市佐久 (佐久市) 駒村 元方
ひそやかにおくやみ欄に記されし若き女性の一世を憶ふ (長野市) 近藤 光子

選 評

第一首、「お父さん教えて」が亡き夫への信頼感や2人の温かな時間を連れてくる。下句との対比に終わらないのだ。第二首、「わっしょい」ビッじの繰り返しに耳に残る。シンプルだが子ども神輿の愛ら

しい賑やかさが聞こえてくる。第三首、場面が具体的で、音や動きがある。生徒は英語ではなく猿の気配に耳を澄ます？。第四首、南部鉄器の重厚な風鈴。音を聞いてみたいが、最近の「強風」は怖い。